

ヤンデレ王子の甘い誘惑

Nagi & Ribito

小日向江麻

Ema Kobinata

eternity



エタニティ文庫

目次

ヤンデレ王子の甘い誘惑

5

ヤンデレ王子と甘い生活

263

書き下ろし番外編

ヤンデレ王子の弛たゆまぬ盲愛

319

ヤンデレ王子の甘い誘惑

プロローグ

『結婚』するって、夫婦になるって、一大決心が必要だと思っ。

言うまでもなく、どうでもいい人と死ぬまで添い遂げるなんて不可能だ。だからこそ、伴侶は慎重に選ぶ。念には念を入れ、同棲までして結婚前に相手を見極めるカップルだ。だって少なくない。

それくらい、人生においてパートナー選びは、大きな選択ということだ。

同時に、神聖な行為でもある。結婚式が教会や神社など、神様と繋がる厳かな場所で行われる儀式であるのは周知の事実だ。

「何があっても愛し合います」と、これ以上ない真剣な面持ちで見つめ合いつつ、神様の前で誓うのだ。

この人なら自分の人生を預けていいと思える人……本当に愛している人と『結婚』する。

私、吉森風も、そんな風に考えるひとりだったし、それが当然だと信じて疑わなかつ

た——今、薄茶色の線に縁ふちどられた用紙にペンを走らせる、この瞬間までは。

「……………」

まだどこか迷いを抱いたまま、用紙の上部に視線を向ける。

『婚姻届』と記されたその部分をぼんやりと見つめていると、胸に信じられないという感情が満ちてくる。

夢のなかにいるときにも似た、現実感が欠如した感覚が私を支配する。

そんな変な感覚のまま、『妻になる人』という項目の真下に、自分の名前をかきこまった字体で丁寧に書き込んだ。

そのとなりにには、『夫になる人』の欄が。そこにはすでに、名前が記してある。
浅野理人。

繊細で美しい彼の文字と、自分の丸っこい癖のある文字がこんな形で並んでいるなんて、やっぱり変だ。

「書けた？」

「も、もう少し待って」

向かい側に座る理人に訊ねられたので、私は慌てて自分の作業に戻る。

「……………うん、大丈夫だ」

私書き終えて渡した婚姻届をチェックしながら、理人が言った。

「これを提出したら、俺たちいよいよ夫婦になるわけだよな」
——夫婦。

彼の言葉に、私の心臓が早鐘を打つ。

そうだ。彼がこの紙を役所に提出したら、私……結婚しちゃうんだ。

理人と結婚する。

理人と、夫婦になる。

「けど、本当にいいのかな」

押し込めていた迷いが、思わず口をついた。私は彼の目をまっすぐに見つめる。

「——私たち、婚約者でも恋人でもないのに……結婚なんてしちゃって」

結婚とは、本当に愛していると誓うことのできる、ただひとりの男性とするもの。

その考え方は変わっていないし、これから変えるつもりだってないのだけど……

ごめんなさい、神様！

偽りの愛を誓う私を、許してください。

——吉森風、二十五歳。

私は事情により、親友の浅野理人と結婚します！

1

「いったい、私の何が悪いっていうの？」

二杯目のビールを呷りながら、私は深くため息をついた。

まだ残暑の厳しい九月の中旬。今日は、仕事帰りのサラリーマンやOLさんがホッと息を抜くことができる金曜日の夜だ。

とある行きつけの洋風居酒屋の個室で、私は久々に旧友たちと会っていた。

「ただだよ、また突然フラれたの。今回こそは上手くいくって思ってたのに……」

恨み言のような台詞を吐き出したあと、苛立ちを誤魔化すように、手にしたグラスの中身を喉奥に流し込む。

ビールの弾ける炭酸は、一瞬の恍惚を与えてくれるけれど、私の傷ついた心までは癒してくれない。

「え、風、またフラれちゃったのー？ かわいそー」

右どなりで唐揚げを頬張りつつ、恋バナ好きの女子高生みたいな口調でそう言ったのは、ゆるく巻いた髪とピンク色のリップが似合う、笹原杏。

彼女はショップ店員という職業柄、いつも流行のファッションに身を包んでいる。

「杏、楽しそうに言わないでよ。こっちは深刻なんだから」

「あはは、ごめん。だって、学生時代から変わらないんだなーって思ってる」

甘い声で謝る杏を、私はムツとして睨みつける。

すると、杏の正面に座る落合淳之介が、耳の痛いことを言ってきた。

「変わんないなー、凧は。通算何回フラれてんだよ」

「そんなのいちいち数えてたら精神がもたないよ」

即、やさぐれて答える。

淳之介のヤツ、杏と一緒にあって面白がっている。

……ふんっ、他人事だからって。

「フラれたのは気の毒だと思うけど……その、いつも相手のほうから別れを切り出されるってことは、何か理由があるんじゃないか？」

「それって、私に原因があるって意味？」

淳之介のとなり——私の真正面に座り、カシスオレンジを舐めるように飲む小嶋大輝、通称コジの言葉に、私は不機嫌に答えた。

コジが焦った様子で、片手をぶんぶんと勢いよく振る。

「いや、凧に原因があるとかじゃなくて……たとえば、第一印象とイメージが違った、

とか」

『いい人』を具現化したような、人当たりのよさそうな顔つきに、ワイシャツを第一ボタンまできっちり留めている彼は、その見た目に反することなく、誰にでも気さくで優しい。

「イメージ、ねえ……」

そうだったろうか、と考えてみる。けれど——

「そもそも付き合って一ヶ月だったし、お互いまだ素と言えるほどの素を出してたわけでもないと思うんだけど」

週一回デートをするかしないかくらいの距離感だったのだ。別れを切り出すほどのギヤップがあったとも考えにくい。

……いや、私に気が付かないだけで、何かやらかしてしまっていたのだろうか。であれば、自信がなくなってくる。

おしとやかかガサツかと問われれば、ガサツ。繊細か図太いかと問われれば、図太い。それが私だ。

一回ずつデートをこなしていくたびに、相手方に「こんなはずじゃなかったー！」なんて思われていたんだとすると……否定できないかもしれない。

「確かにそんな何もないって状況で、突然フラれるなんて、変だよ。凧は別に男の子

の前でキャラ作ってないし、表裏ない性格してるのに」

メガネのフレームを押さえながら不思議そうに呟いたのは、武井百合絵。ちよつと高めで透き通った声は、他のメンバーよりも控えめなポリウムだ。

「百合ちゃんだけだよ、私のことをフォローしてくれるのは」

私は左どなりの百合ちゃんに泣きつく真似をしながら、彼女の肩口に顔を埋める。

サラサラのシヨートヘアから、柑橘系の果実の香りがした。

百合ちゃんは腕力する私の頭を「まあまあ」と宥めながら撫でてくれた。

「風、元氣出してよ。風が悪いわけじゃないと思うよ」

「百合ちゃん……」

天使だ。今の私には彼女が天使に見える。

他の仲間たちは菌に衣着せない、厳しい意見をぶつけてくるけれど、百合ちゃんの発言は私に希望を与えてくれた。

その優しさに癒されていると――

「それはどうだろうな」

と、斜向かいから茶々が入る。理人だ。

最も辛辣な言葉を投げかけてきそうな男が、ここにいたのを忘れていた。

浅野理人。スーツ姿の淳之介やコジとは違い、黒いギンガムチェックのシャツにジ

ンズというラフな装いの彼は、ビールで満たされたジョッキを傾け、意地悪げな笑みを湛えながら続ける。

「付き合った彼氏にことごとくフラれてきただけじゃないだろ、風。お前が好きになって告白した男からOKの返事がもらえた確率は、何パーセントだった？」

理人の涼しげな言葉が、忘れかけていた古傷を抉ってくる。

「……………ぜっ」

「ん？ 聞こえない」

「……ゼロパーセント」

理人がせっついてくるので、項垂れて答えた。

そうなのだ。

私の男運のなさは、今までの彼氏全員から別れを告げられたという出来事に留まらない。

好きになって告白した相手から、もれなくごめんなさいをされているのだ。全敗という不名誉な経験を思い出し、気持ちが悪く暗くなる。

「あー、そういえばそうだったよね。『また告白失敗した！』って落ち込んでること多かった気がする」

「そのたびにファミレスに連れて行って、みんなで慰めてたもんな」

杏と淳之介が当時を懐かしむみたいにな、しみじみとした口調で頷いた。

……思い出したくない記憶の扉が、勝手に開いていく。

「逆にここまで徹底してると、尊敬する領域だよな」

「私だってフラれたくてフラれてるわけじゃないんだってば」

理人がわざとらしく感心したような口調で言うので、私は口を尖らせた。

「っていうか！ 理人が言うのと嫌味な感じ」

「何で？」

「それを言わせる？」

ちっとも心当たりなんてないと言いたげな彼に、肩を竦めた。

まさか自覚がないわけじゃあるまい。

それとも、本気で疑問に思っているんだらうか？

「だってー、理人なんて絶対勝率百パーセントに決まってるもんね。聞いただけヤボって

ことだよー」

訝る私の代わりに杏が答えてくれる。

「天下無敵のスーパーモデルに告白されて、靡かない女の人なんているのかな」

「そーそー。俺たち一般人とは格が違うもんなー」

コジヤ淳之介も彼女の言葉に深く頷き、「いいなー」なんてボヤいている。

私たちは全員同じ大学の同級生で、なんとなく行動をともにするようになった仲良し六人グループだ。

卒業後も誰かの声かけで必ず集まる間柄あいたがら。私たちのうち五人は、普通に就職活動をして、普通に社会人になった。だけど、理人だけは少し毛色が違っている。

と、いうのも、彼はプロのモデルなのだ。

大学時代にモデル事務所からのスカウトを受け、理人は男性ファッション誌の読者モデルを始めた。するとその端麗な容姿からすぐに人気に火がつき、雑誌の表紙を飾ったり、某アパレルメーカーのイメージキャラクターやCMのオファーが舞い込んでくるまでになったのだ。そして今や、日本人なら誰もが顔を知っている、とすら言えるほどのスーパーモデルとなっている。

「うん。理人くんがCMに出てると、私まで誇らしい気持ちになるよ」

汗をかいたウーロン茶のグラスに手をかけながら、百合ちゃんがまぶしそうに理人を見た。

それについては、私も同じように思っている。

テレビや街の広告で活躍している友人の姿を見るのは、素直に嬉しい。

まあ、人気者ゆえに人目のある場所では会いづらくなって、理人が遠い場所に行ってしまったような寂しい気持ちにならないわけではないけれど。

でも、私たち五人は、一様に彼の頑張りを応援しているから、そんなのは微々たる問題だった。

「理人をふるような女の子がいたら、逆に会ってみたいわ」
私は降参するように両手を上げた。

身内びいきとかではなく、理人は本当に綺麗な顔をしている。眉は直線的ではあるけれど、ゆるくアーチが掛かっている。二重ふたえの大きな目に、長くて濃い睫。鼻筋はスツと伸びていて、唇は上下がバランスのいい厚みで弧を描いている。やや日本人離れしている容貌は、思わずじっと見つめていたくなるほどだ。実際、大学の授業では、彼が座る左右の島は、女子学生で埋まっていたように記憶している。理由は言うまでもなく、彼の横顔を眺めるためだ。

そんな強烈なアドバンテージを持つ彼に、男性からフラれまくるといふ不名誉なエピソードを突かれれば、嫌味だと思ってしまうのは致し方ないだろう。

「その割にさ、理人は彼女作らなかつたよな」
ふと思いつ出したように、淳之介が言った。

「あー、そうだよね。どーしてだろーね？ 引く手あまただっただろうに」
どうして、なんて訊ねつつも、杏はまるで何かを知っている風にニヤニヤしている。

「……まあ、あの感じじゃ作れないよね」

杏の顔を見たコジが、ちよつと困つたような表情で笑う。

「……『あの感じ』？」

「——どう、最近は。芸能人の彼女できたか？」

理人に訊ねながら、淳之介はなぜか私の顔を一瞥いちめつした。

それに倣なまうように、他の仲間も私の反応を窺うかがっている。

私を見たつて答えなんて書いてありはしないのに。変なの。

「いないよ、そんなの」

「いーじゃん。内緒にするからさ、教えろつて。相手はアイドルか、モデル仲間か？」

淳之介は、面倒くさそうに言う理人の肩をぽんと叩いたあと、耳を澄ますような仕事で答えを促うながした。

「いないんだつて。仕事のことと頭いっばいで、そんな余裕ないんだよ」

理人は野次馬根性丸出しの淳之介の追及に、きっぱりとそう告げる。

確かに、大学時代から今に至るまで、理人に彼女がいるという話はまったく聞かなかつた。

彼女以前に、好きな人の話なんかも、全然。

彼こそ意中の女性がいるなら、すぐに気持ちを通じそうなのに。

いや、通じるに違いない。何といつても、彼は浅野理人——スーパードモデルだ。

もつたいない……というのが、率直な感想だった。

「杏とコジ、何か知ってるの？」

理人に彼女がいない理由を知っていきそうな二人にそう訊ねてみると、杏が外国人よろしく「さあ？」と肩を竦めるようなリアクションをした。

「知ってるような、でも知らないって答えたような……」

「世のなかには知らないほうが幸せなこともあるんだよー、風。うんうん」

「……」

ふたりの言葉の意味がよくわからない。

当の理人はというと、まるで俺には関係ないとばかりに澄まし顔をきめている。

やっぱりよくわからないけど、まあ気にしてもしょうがないか。

「理人のことなんていーんだってば。問題は私よ、私」

いずれにせよ、ヤツなら本気を出せば秒速でパートナーを作れるんだから。

私はバシッとテーブルを叩いた。その衝撃で小皿の上に置いていた箸が転がり、カランと音を立てる。

「せっかく久しぶりにできた彼氏だったのに、もう、どう立ち直っていいかわからないよー……！」

私の職場は男女ともに既婚者が多くて、なかなかフリーの男性と知り合う機会がない。

そんな環境下、たまたま行った飲み会で連絡先を訊いてきた希有な男性が彼氏——いや、もう元カレか——だった。

三回目のデートで告白され、少しずつではあれど順調に愛を育んでいたはずなのに……

『ごめん、やっぱり風ちゃんとは付き合えない』

理由という理由も告げられず、青天の霹靂とも言える一言で、私たちの交際は終わった。いや、私にとっては強制終了させられたようなものだ。

何で付き合えないの？ 私のこと、好きじゃなくなっちゃったの？

問い詰めた気持ちは十二分にあったものの、実際にそうすることは憚られた。

どんな理由があったとしても、元カレが最終的に選んだのは私と別れることだったのだから、何を訴えても意味がないような気がしたのだ。

終わってしまった恋愛に縋るより、気持ちを切り替えるべき。

まだまだ恋愛のチャンスは多方にある——なんて自分に言い聞かせてみたけれど、気が付けば私も二十五歳。四捨五入すれば三十歳で、アラサーもすぐそこに迫っている。

構ってちゃんだと思われてもいい。今夜だけは、気心の知れた仲間、この不幸な私を一生懸命、誠心誠意、慰めてほしい。

じゃないと、地の果てまで落ち込んでしまいそうで怖かった。

「そんなに沈むことないよ」

それを知ってか知らずか、コジが私に励ましの声をかけてくれる。

「そうだよ。その彼氏は、風の運命の人じゃなかったってだけ。いつもの明るい風であれば、きっとありのままを好きになってくれる人が現れるよ」

期待していたとはいえ、コジと百合ちゃんの言葉に救われる。

そうだ、ここまで落ち込むことはないんだ。

私はまだ、この世のどこかにいるであろう運命の男性に出会っていないだけ。

出会うべきその人と顔を合わせることができたなら、この悲しみすら真実の幸せを得るためのステップだったのだと思えるかもしれない。

「そうだよ、風。運命の人は出会ったらすぐにわかるんだから。わたしはジュンに会った瞬間、絶対にこの人と結婚するって思ったもん」

ね——とアイコンタクトを交わしたのは、杏と淳之介。

実はふたりは大学時代から付き合っていて、みんなも公認の仲だ。

どちらかがアプローチをした、というよりは、自然と惹かれあってそのまま……という感じ。彼女彼女の間柄になって、もう五年は経つだろうか。

卒業や就職を経てもふたりの関係にヒビが入ることはなく、むしろより愛情が深まったようで、昨年から結婚を見据えて同棲を始めたらしい。

……羨ましいいったらならない。その幸せ、少しでもいいからわけてほしいものだ。

「じゃあ杏、私に運命の人の見分け方教えてよ。後学のために」

「うーん、そうだなあ」

杏はミルキーピンクに彩られた人差し指を唇に軽く当てて、考えるような仕草をする。

「ドキドキする気持ちと、一緒にいて安心できる気持ち。両方感じられること、かなあ」

「ドキドキ感と安心感、ねえ」

何だか相反する要素な気もする。納得していない様子の私に、杏はアルコールのせいとか、ややとろんとした瞳で続けた。

「矛盾してるように思うかもしれないけど、わたしはそうだよ。ジュンにドキドキするけど、一緒にいてホッともできるの。そういう人って、貴重だよ。ね、ジュン？」

「……あんまり恥ずかしいこと言うなよ」

改めて言葉にされて面映ゆいのか、淳之介にしては歯切れの悪い言い方で呟くと、ゆるめのパーマが掛かった黒髪をかいている。

「えへへ、照れてるでしょ」

「杏がそういうこと言うからだろ」

カップルらしい言葉の応酬に、その場に糖度高めな空気が流れる。

私を含めた他の四人をそっちのけで、お互いに見つめ合ったりして。完全にふたりの世界だ。

「なるほど、そのふたつを兼ね備えているのが運命の人ってわけね」

幸せ全開の杏と淳之介が恨めしくて、私はその甘々な空気を断ち切るように言った。

とはいえ、ゴールイン間近のふたりが言うなら説得力がある。いつか訪れる出会いに備えて、参考にさせてもらおう。

「私、諦めないで頑張る！ こんな私のことでも好きになってくれる人が現れるのを信じて、その運命の出会いとやらに期待してみるよ」

「そういう物好きがいれば、だけどな」

「ちよつと理人！ どうしてまたそういう意地悪言うわけっ？」

やり場のない悔しさから解き放たれ、やつと気持ちさが前向きになってきたところだったのに。

「意地悪とかじゃなく、素直な感想を言ったただけけど」

むかつ。私のこと好きになるような男はいないって言いたいわけ？

「物好きとは何よ。私もね、まったくそういう声がかからないわけじゃないんですけど」

「で、今回みたいにそのうちフラれるんだろ」

「うっ……」

さっきまでの負のループへと再び突き落とされて呻く。気分は右ストレートを真正面から食らったボクサーだ。

「理人は相変わらず風到手厳しいよね」

変わってないな——と言いたげにコジが笑った。

理人はどういうわけか、いつもそうだ。

私と彼の仲は、この六人グループ内でもとりわけいいほうだと思っている。学生時代と一緒にいた時間や、現在連絡を取り合う頻度は他の誰よりも高い。性別は違うけど、親友といえる仲だ。なのに、理人は私に好きな人ができて、応援してくれたことは一度もない。

もちろん、仲の良さゆえに普段から軽口を叩き合う間柄ではあるのだけど……何とというか、恋愛系統の話をする時、特に私への態度が厳しくなるのだ。

さらには、私が思いを寄せている人に対して「ソイツのどこがいいわけ？」とか、「上手くないじゃない？」とか、不安を煽るような言葉を投げってきたりして——

「ふーんだ、今に見てなよ。理人がびつくりするような、心身ともにイケメンの彼氏捕まえてみせるんだから。で、『あのときは失礼なこと言ってごめん』って謝らせてやるっ」

「期待してるわ」

「あっ、本気にしてない！」
「まったく心の籠こもっていない台詞せりふは、私の啖たんか呵かをさらっと聞き流していることを示していた。」

くっ、憎たらしい！ 自分には無縁の悩みだからって！

「あっ、そういえば！」

薄いみかんサワー一杯ですっかり酔っ払ってしまった杏が、ふと思いついたように言った。

「風、わたし風に紹介できる男の人いたわ」

「えっ？」

私はやや前のめりになって訊ね返す。杏はうんうんと頷うなずいて続けた。

「同じシヨップで働いてる子の男友達んだけど、たまたまお店の飲み会してるときに居合わせて、軽く話したんだよね。イケメンだったし優しそうだっし。ちょうど彼女と別れたばかりって言ってた」

「杏、いいの？」

なぜか百合ちゃんが、ちよつとびくりとした表情で言った。そして理人に一瞬視線を送り、杏に何かを訴えかけるかのようにしている。

「え、だめ？」

「だって……」

杏は大丈夫だと片手をひらりと振った。

「へー、いいじゃん。その人に会ってみれば？」

やや声を張り上げて、淳之介が重ねる。百合ちゃんはやや硬くなっていた表情を和なごらげ、今度は何かを察した様子で大きく頷うなずいた。

「そうだね、風。いい機会だし、向こうが乗り気だったら一度デートしてみるのもいいかもしれないよ」

「デートかあ……」

相手がどんな人物なのかわからない状態で、いきなり一対一のデート。

本来なら、「見も知らぬ人とデートだなんて正気の沙汰さたじゃない！」とか考えてしまいがちだけど……案ずるより産むが易やすしという言葉もあるくらいだ。

深くは考えず、とりあえず一回会ってみようかな——。それくらいの軽い気持ちで臨のぞんだほうが、リラックスできて、次に繋つながるのかもしれない。

「うん。杏が紹介してくれるって言うなら、その言葉に甘えちゃおうかな」

まだ躊躇ちゅうちよする気持ちは残るものの、一步を踏み出さなければという思いで、杏の申し出を受け入れることにする。

「上手くいくといいね」

「ま、せいぜい頑張りな」

ホツとした表情を見せながらエールを送ってくれるコジに対し、理人はやはり小馬鹿にしたように言い放った。

——言ったな。本当に頑張つてやるんだから。

「……………だな」

「え、何か言った？」

心のなかで決意を固めていると、理人が何か呟いたようだった。

聞き逃した私が訊ね返すけれど、理人は「いや」と首を横に振って余裕ぶつた笑いを浮かべているだけだ。

くっ、どうせまたバカにでもしたんだ。

「……………あれ？」

みんなの顔を見渡してみると、理人の態度とは対照的に、それぞれの顔から笑みが消えていた。

それどころか、ちよつと引き攣くわっているようにも見える。

「じゃ、じゃあ——風の恋愛模様こゝろに希望が見えてきたところで、飲み直そうぜ——改めまして、かんばーい」

顔面の硬直を一番に解いた淳之介が、仕切り直す風に声を張る。

「かんばーい！」

淳之介の音頭おんどに合わせて、私たちは各々のグラスを軽く掲げた。

理人が何を言ったのか気にならないではないけれど、みんなすぐに普段通りのテンションに戻ったから、大したことではないのだろう。理人の私に対する厳しい言葉を使いちい気ちいにしても始まらない。

それにしても、仲間たちと飲むお酒は、やっぱり美味おいしい。

私たちはこの日も、学生時代に戻ったかのような気分で、終電近くまで盛り上がったのだった。

2

「えっ、キャンセル？」

「そうなの、ごめんね、風。せっかく予定空けといってもらったのに」

電話越しの杏が、至極申し訳なきような声で謝っている。

今日は私が荒れに荒れていた飲み会から一週間後の週末。時刻はただ今、午後一時だ。

杏から着信があったのは、遅めの起床のあと、部屋の掃除を軽くすませて、そろそろお昼ご飯にしようか……というときだった。

酒の席での口約束だったけれど、杏は律儀にもその後、件の同僚の男友達と連絡を取ってくれていた。そして「軽く飲みにも行っておいで！」とセッティングをしてくれたのが、今夜。

ところが今しがた、その男性からキャンセルしたいというメッセージが来たらしい。

「……ちなみに、理由は何か言ってた？」

「えっと、それが……」

言いくさそうに言葉を濁す杏。

「よくわからないんだよね。さっき急に都合が悪くなったって連絡が来て、そこから返信がないの」

「何それ」

「まあ多分、仕事とかじゃないかな。また仕切り直すから、今回は勘弁してあげて」

「うん、それはいいんだけど……」

仕事によってプライベートが侵食されるのは、まああること。それは社会人になってから身をもって知っているのだから、そこを責めるつもりはない。

だから、そうじゃなくて……

「杏、その人に私のこと、詳しく喋ったりした？ フラれてばかりとか、あと、写真送ったりとか」

「え、全然だよ。『会ってほしい子がいるから、今度飲みに行ってみない？』とか、それくらい」

「うーん、じゃあ私に原因があるわけじゃなさそうだよね……」

「都合が悪くなった」という本人の言い分を信じないわけではないけど、今まで男性から拒まれ続けている身としては、その要因が私にあるのではという疑念が捨てきれない。「当たり前でしょ、別に相手が風だからそういう返事が来たわけじゃないって。そもそもセッティングするってやり取りしたときは、向こうも乗り気だったんだから。考えすぎだよ」

杏が笑い飛ばすような明るい調子で言うので、それもそうか——とモヤモヤした気分が晴れる。

「わかった！ じゃあ、その人とはまた都合のつくときに会わせてもらおうとして、今日ご飯食べに行かない？ 淳之介も空いてるなら、一緒にどう？」

「ごめん。今日はふたりで、ジュンの実家で夕食をご馳走になることになってるの」
予定がなくなったこともあり、杏をご飯に誘ってみたけれど、淳之介の実家に行くならさすがに無理か。……ん？ 実家？

「あ、もしかして……」

「そうなの〜!」

ひとつの可能性に気付いて言った私の言葉に、すぐに上機嫌な声が返ってきた。「いよいよね、結婚の話をしに行くことになったんだー。一緒に暮らして一年経つところには結婚しようねって決めてたから、もうそろそろいい時期かと思ってる」

やっぱりそうか。

先週の飲み会でも「結婚はいつ?」なんてせっつきにまんざらでもないような態度をとっていたから、そんなに遠くない未来なのかな、とは思っていたけれど。

「よかったじゃない。それで、淳之介の実家から先に?」

「うん、まずはね。うちの父親、わたしのことを溺愛してて、すんなり進まないかもしれないから」

杏のお父さんは、同棲にだいぶ反対していたようだ。杏と淳之介が同棲して一年経つまでに結論を出そうと決めていたのは、杏のお父さんが、結婚するのかもしれないか宙ぶらりんの時期が続くのを嫌うとわかっていたからなのだろう。

「いいんじゃない。まずは淳之介のご両親に認めてもらって、しっかり地固めしてから杏のご両親のところに行けば」

「そのつもり。お父さん、ジュンのことを嫌ってるわけではないから、そこまで心配も

していないんだけど。でもやっぱり緊張するよね、こういう話は」

言っている内容の割に、杏の声は幸せに満ちていた。

言葉の端々に音符マークが見え隠れするような口調、とてもいうのだろうか。気持ちが弾んでいる様子が、電話越しでもしっかり伝わってくる。

「——そういうことなら、頑張ってきてよ。淳之介にも、しっかりねって言うて」

「うん、ありがと。伝えておくれね。……それじゃ風、ごめんね」

「いえいえ。またね」

通話を終えると、私はベッドに投げ出していた身体をゆっくりと起こした。

杏と淳之介、ついに結婚するんだ。

ふたりの歴史をよく知っているだけに、私も嬉しい気持ちになる。

まあ、自分にとっての新しい出会いが遠のいたのは残念ではあるけれど、相手にも事情があるのだから仕方ない。

私は、クローゼットの扉にかけてあるワンピースに視線を向けた。

秋っぽくスモーキーなピンクに彩られたそれは、裾がフレアになっていて可愛らしいイメージ。普段、カジュアルな恰好を好む私が選ばないタイプの装いだ。

先日仕事帰りに、自分の飾らないところがだめな一因なのかも……なんて考えていた

タイミングで通りかかったショップで見つけたものだ。

「これだ！」と勢いで購入したことに、後悔はない。

何かを変えるには、自分にも変化を取り入れなければ——なんてそれっぽいことを自分に言い聞かせてみたけれど、実際のところは、ただ単に足掻いてみたかっただけだ。

何もしないよりは、ジタバタしてみたほうが落ち着くような気がして。

……ジタバタする以前に、約束それ自体が取り消されるとは夢にも思っていなかったけれど。

「はあ……」

やるせないため息がこぼれる。

杏のことはもちろん嬉しいし、喜ばしい。けれど……結婚の報告をしに行く友人に対し、まだ恋人がいまいどころか、男性とのデートをキャンセルされた私、というコントラストの効いた現状が切ないのだ。

こんな気持ちのまま、休日が過ぎていくのは辛い。

週末をどう楽しむかを考えることで、平日の仕事を乗り切っている私だ。せめて誰かと会って気持ちを紛らわさなければやっていられない。

どうしようか。百合ちゃん、空いてたりしないかな。

彼女の連絡先を表示しようと携帯の画面に視線を落とす。と——

「あ」

携帯がブルブルと振動して着信を知らせた。

中央には、理人の名前が表示されている。

「もしもし」

すぐに携帯を耳元に当てて言った。

「俺だけど、今いい?」

「うん、大丈夫」

理人の声に頷きながら、再びベッドに横になる。

「理人、今日は仕事、休みなの?」

休みがカレンダー通りである私と違い、いわゆる芸能人を生業（なまわい）としている理人は、週末が休日とは限らない。私の問いに、彼は「ああ」と短く答えた。

理人も休みか。

「どしたの、何か用事?」

「風、今夜暇?」

「うん、たった今暇になった」

「何だそれ」

理人がおかしそうに笑う。

「私も何だそれって感じだけど。……うん、ちょっと予定がキャンセルになってね」

「ああ、杏が紹介してくれるとかいう男との約束？」

「え、私、理人に言ったっけ？」

杏が理人に教えたんだろうか。上手いかなかったときにまたバカにされそうだったから、理人にはあまり知られたくなかったのだけれど。

彼は、肯定とも否定とも取れるように小さく笑った。

「ならちよūdいいな。今夜、飲みに来いよ」

そして彼は、さらりとそう言った。

「飲みに来い」というのは、理人の家に行くということだ。

いくら親友とはいえ、男性が妙齢の女性を家に呼ぶ……それも一対一で、となると、アヤシイ妄想が溢れてしまいそうになる。

けれど私たちに限っては、そういうった心配はない。というのも、一対一だからこそ、理人の家であることが重要なのだ。

今やスーパーモデルとなってしまった理人は、常に周囲からの視線というものを意識しなければならぬ。

外で理人と会い、それを誰かに見られたり写真に撮られたりしてしまうと、「理人の彼女か？」なんて勘違いされてしまう。

理人には、熱狂的な女性ファンが多い。

人気商売の彼に、迷惑をかけるわけにはいかないのだ。

「理人がどうしてもって言うなら、行ってあげてもいいよ」

「お前、上からかよ」

「うそうそ。うん、久しぶりに行こっかな」

大学時代から、ちよくちよくふたりで飲んでいた。

理人の名前が世のなかに知られるようになってからも、その関係は変わらない。むしろ、有名になってからのほうが、彼の家で飲む機会は多くなっていた。だから今さら躊躇ちゆうちゆうすることはない。それに、この変に盛り下がった気分のままであるのが嫌だった。

「来いよ。お前が飲みたがってたビール、用意してあるから」

「えっ、ホント？ 行く行く行く、絶対行く！」

「ゲンキなヤツ」

呆れまじりの笑いが電話越しに聞こえる。

「じゃ、適当な時間に来て。フロントには伝えておくから」

そう言って、理人は電話を切った。

いつもこんな風に、細かい時間は決めない。夕方とか、夜とか、ざっくりした時間だけ告げて、あとは何となくこれくらいかな、というタイミングで彼の部屋のインター

ホンを押すのだ。

「さて、と」

私は起き上がると、再度クローゼットの前にかけてあるワンピースを見つめた。

理人と会うのに気合い入れてもしようがない。けれど、せっかくだし、着たつていいか——

ワンピースを手に取り、私は手にしたそのの、背中のジッパーを下ろした。



理人のマンションは、都内の一等地にある。

名門校や大企業の本社が集まる歴史のある街。そこに建つ高めのビル群のなかでもとりわけ存在感を放つタワーマンションが、彼の城だ。

それまで彼が両親と住んでいた実家も都内で、友人たちと遊びに行っただこともあった。そこは二三区の北側で県境の下町だったから、今住んでいる場所との雰囲気の違いは、本人が一番感じているに違いない。

大学三年のとき——理人が某ファッション誌の表紙を飾ったところに、彼はひとり暮らしを始めた。よく通うスタジオまでの距離を短縮したかったかららしい。

家賃を聞いてびびくり仰天したけれど、当時すでに、それくらいは無理せずとも払えるようなポジションにいたということだ。

あつという間に有名人になってしまったんだなー、と、建物を目の前にして物思いにふけたことが懐かしい。

学生との二足のわらじではさぞかし忙しかったのだろう。そのころから、理人は大学の授業を休むことが増えていった。

といっても、教授はそれに気付いていないはずだ。私たち友人が持ち回りで代返をしてあげていたから、テストさえ落とさなければ、単位はちゃんと取れていた。

あれだけの活躍をしながら無事に卒業できた理由は、私たちの頑張りが大部分を占めると言っている。いや、そう言わせてもらいたいものだ。

午後七時前。空が徐々に薄青から濃紺へと変化していくころ、私は天井の高い大きなエントランスを潜った。

まるで高級ホテルのロビーのようなその場所は、豪奢、華美というワードがびったりハマる独特の空間だ。幻想的なオブジェや絵画が並んだそこには、二十四時間、常にコシエルジュの姿がある。

私がよく見かけるコシエルジュは男性で、清潔感のある短髪の、優しそうな人。

私をはじめとした友人たちが、理人の家に遊びに来ることは多い。そこまで頻繁とは

言えなくとも、ある程度定期的に姿を見せる私たちの顔を、男性コンシェルジュはしっかりと覚えてくれている。

彼に促され、セキュリティスペースを通って、エレベーターホールに進んだ。

私の知っているどのマンションよりも、エレベーターへ行くまで時間がかかる物件だ。途中、マンションの共用スペースであるラウンジやカンファレンスルームの横を通り、左右に三つずつあるエレベーターのうちの一基に乗り込んだ。

エレベーターのなかは鏡ばりで、ピカピカに磨きあげられている。スモークキーピンのワンピースに、黒いロングカーディガンを羽織る私の姿が、そこに鮮明に映り込んでいた。こんな箱のなかまでくまなく清掃が行き届いていることに感心してしまう。

庶民的な感覚が強い私は、当初この光景を目にしただけでも怯んでいた。でもさすがに何年も出入りしているうちに慣れた。

理人の部屋は十八階。ボタンを押すと、エレベーターは静かに上昇する。

程なくして、目的の十八階に到着した。理人は、エレベーターを降りてすぐ目の前にある1806号室に住んでいる。

インターホンを押すと、重そうな扉が薄く開く。

「入って」

理人の声に促されて、私は扉を引いて室内に駆け込んだ。そして、すかさずその扉を

閉める。

「またやってんの、それ」

私の行動に、理人は声を立てて笑った。

「だって心配じゃん」

「そこまで意識する必要ないって言ってるんだろ。セキュリティついてるんだし」

以前、このマンションにはある大御所の俳優さんが住んでいた。名前を聞いたら誰もがわかるレベルの、大変有名な人だ。

その俳優さんの奥さんも実力派女優で、ふたりはおしどり夫婦として知られていた。だけど、ある日奥さんの留守中に、俳優さんがデビューしたての若手女優を自宅に連れ込んでいるのを、写真週刊誌に撮られてしまったのだ。

その話を理人に聞かされてから、私は彼の部屋への出入りを妙に警戒するようになってしまった。

「だって、あの俳優さんのときだって、セキュリティはついてたわけでしょ」

「だから、あれは運が悪かったんだって。他の階のゲストのフリした記者がセキュリティを突破して待ち伏せしてて、結果的に不倫がバレたけど。それ以来ゲストのチェックも厳しくなったみたいだし、気を揉む必要なんてない」

「まあ、そうかもしれないけど……」

何かあったとして、私はいい。一般人だから。

でも理人は違う。女性ファンを多くもつ人気モデルである彼に、女性とのスキャンダルが出たりしたら……たとえそれが事実でなくても、彼の仕事に影響を及ぼしてしまうだろう。

そんなのは嫌だ。

彼がこれまで築き上げてきたものを、私の不注意なんかで壊したくない。

「あんまり深く考えんなよ。俺とお前は何でもないんだし。それより」

玄関口でパンプスも脱がないままの私の姿を、理人はじっと見つめた。

「——風にしては、小綺麗な恰好してるな。どうした？」

「いつも汚い恰好してるみたいと言わないでくれる」

さすがはモデル。普段と違う装いが気になったらしい。

しかし、その言い草は何だ。たまにはイメチェンを楽しんでみたっていいじゃないか。本当は新たな出会いに備えて用意した服だけ……運が悪ければ着ないままお蔵入りとなるのではと危惧して、着てきてしまった。

「馬子にも衣装だな。悪くない」

「それ褒めてないよね」

「いや、褒めてるって。お前にしては上出来だよ」

「上出来って」

くっ、また上から発言なのがムカつくっ。

「逆に俺がこんなやる気ない恰好で悪かったな」

そう言った理人は、ダークグレーのジップアップパーカーとスウェットという、T H E・部屋着な服装だ。

「いや、家だとそんなもんでしょ。バスローブとかシルクのパジャマとかなら面白かったけど」

ハーフだとか外国人っぽいとか言われている彼は、自宅ではバスローブを着てるんじゃないかとか、シルクのパジャマを愛用してるんじゃないかとか、ファンの子たちに噂されたりしているらしい。けれど、もちろんそんなことはない。

夢を壊すつもりはないけれど、スーパーモデルだって、自宅では至ってノーマルなチヨイスをするのだ。

「着るわけないだろ、落ち着かないし」

理人が苦笑いで答える。

顔には似合うけど———と思ったけど口には出さなかった。

とはいえ、彼が身に纏っているパーカーとスウェットが上質なものであるのは見てわかる。

おそらくブランドものなのだろう。でも私はあまり詳しくないので、それがどれくらい価値のあるものなのか、人気なのかそうでないのか、ちっともわからない。

「いいから上がれよ。もう用意はできてる」
「やった。お邪魔しまーす」

スウェットのポケットに両手を突っ込んで先を行く理人を追いかけるように、廊下の奥へと進む。

廊下の突き当たりは、リビングが続いている。

この間取りはLDK。十五畳はあるだろう広々としたリビングと、衣裳部屋を兼ねた寝室で構成されている。

リビングには存在感のある黒い革張りのソファセットと、ガラスのローテーブル。

ソファと向き合う形で壁に取りつけられたテレビは、六十インチは超えていそうなシロモノだ。

反対側の壁一面に広がる大きな窓は、晴れている日には十分に採光でき、この時間を過ぎると夜景も楽しむことができる。

部屋の奥には、アイランドキッチン。高級感を際立たせる大理石のカウンターには、スツールが三脚セットされていて、まるでバーにいるような気分にさせてくれる。彼の家のなかでも、特に私が気に入っている場所だ。

カウンターにはすでに何種類かのチーズとピクルス、それに生ハムとサラミがお皿に並べられていた。どれも私のお気に入りのおつまみだ。

付き合いが長いだけあり、何も言わなくても理人はこれらを準備しておいてくれる。

本当、親友というのがあるがたい。

「いいね。美味しそう」

自然と歌うような声で言っ、私は一番端のスツールにハンドバッグを置いた。そしてそのとなりに腰かける。

「あれ出してよ、あの飲みたかったビール」

「まあ落ち着けて。あとで出してやるから、まずはスタンダードなヤツで乾杯にしよ
うぜ」

キッチンスペースの最奥に並ぶ冷蔵庫から、冷えたグラスと缶ビールを二本取り出して、理人が戻ってきた。

ビールは日本の、銀色の缶の銘柄のもの。打ち上げやらパーティーやらでいろんなお酒を飲んでいるはずの理人だけど、ビールは日本の、とりわけこの銘柄が一番落ち着くらしい。家に常備してあるのはいつもこれだ。

律儀にもグラスを冷やしておいてくれるところに、彼の几帳面さきちょうめんというか、マメさを感じる。私が現れるだろう時間帯にテーブルセットもすませているところもそうだ。

思えば、昔から気の利く性格だった。

芸能人になってチャホヤされるようになってからも、そんな一面は変わっていない。それがホッとすると。

「ほら」

と言いながら、理人が黄金色の液体で満たされたグラスを片方、私に突き出す。私はそれを受け取ると、

「お疲れさま」

と言って、グラスの縁を軽く合わせた。

「久々のビールって、何でこんなに美味しいの」

何度か喉を鳴らして中身を飲み下したあと、おじさんのような一言が口から出た。

「久々なわけないだろ。こないだの飲み会で飲んでたくせに」

「三日空けば久々の、私にとっては」

となりのスツールに腰かけ、身体ごと私のほうを向く理人に口を尖らせる。

お酒が大好きな私は、平日だろうが休日だろうが、日を選ばずに飲んでしまう。それがストレス解消であり、一番のリフレッシュになるからだ。

アルコールが解禁になった二十歳からそんな感じで、理人は「飲みに行きたい！」と言う私に、根気強く付き合ってくれていた。

あるときはビール、あるときはハイボールを飲みながら、大学の話や友人の話、当時のアルバイトの話なんかを、とりとめもなくしていたっけ。

六人グループのなかで私が理人に一番心を許しているのは、そういう経緯があるからかもしれない。

他のメンバーとももちろんそれぞれ仲はいいけれど、思い立ってすぐ飲みに誘ったり、延々結論の出ない話を繰り返したりするのは、理人が一番多い気がする。

「相変わらず仕事は忙しいの？」

グラスを一度カウンターに置いて、パブリカのピクルスを摘みながら訊ねる。

「まあまあ。イベントが続くから、体調のコントロールに気を付けないとな」

「のんきにビール飲んでる場合じゃないんじゃないの？」

体重をキープするのも体調管理のうちだろう。私が意地悪げに訊ねると、

「そんな余裕。慣れてるからな」

なんて、バツサリ斬られてしまった。……まあそうか、プロだもんね。

ピクルスを頬張りつつ、またビールを飲む。

——ああ、幸せだ。

期待していた異性との出会いは延期となってしまったけれど、週末に気の置けない友人と飲む美味しいビールがあれば、しばらく頑張っていけそうだ。

そんな私の感情は、すっかり表情に出ていたらしい。

「しかしお前、本当に美味そうに飲むよな」

理人がからかうように言って笑った。

「風のほうはどうなんだ、仕事」

「うーん、別に、普通かな」

「何だよ普通って」

「だって普通なんでもん。取り立てて何かあったわけじゃないし」

最近の状況は——と、職場の風景を思い浮かべながら答える。

職場は、某クッキングスクールを経営している会社。下町を拠点に三校を運営しているけれど、小規模かつ少人数制のシステムのため、利益はそれほどでもない。会社としても、まだまだ名前の知られていない新興企業だ。

そこでの私の業務内容は、いわゆる事務。職員の勤怠管理や、受講希望者の選定・案内等々。現場での動き以外のことで、経理が絡んでこない仕事は、ほぼ私が担当している。

こういう表現をすると激務であるように思われてしまうかもしれないけれど、実際そんなことはない。事務の仕事が慌ただしくなる時期は、職員や受講者の入れ替わりがある年度末・年度初めがせいぜいだ。幸か不幸か、それ以外は至って平凡な日々の連続に

なる。

何かどうしようもないアクシデントが起こらない限りは、定時帰りが基本。

休日出勤もなし。有休も事前に申請すれば問題なく消化できる。

大学時代、特にこれといった目的や目標もなく就活をしていた私が見つけたにしては、超絶ホワイトで好条件の職場だ。

上司や同僚ともいい関係を築けているし、我慢できないと思うような業務内容もない。こういった状況って、平坦で肅々としていて、面白みがないと感じる人もいるだろう。けれど、想定外の出来事が起こらなくて平和だ、とも言い換えることができる。そしてそんな平穏さが、私には快適だった。

「順調ってことか」

「そうとも言えるね」

私は小さく笑った。

『平和』、『順調』。

『普通』なんて味気ない言葉よりは、そういう言い方のほうが好ましいか。

「——でもきくと、理人が私みたいな生活してたら、退屈で死んじゃうよ？」

自ら芸能界に飛び込んでいくくらいだから、理人は変化を求める性格なのだろう。

向上心が強いし、野心もある。平坦な道を好む私と違い、彼はアップダウンの激しい

坂道のほうが、好奇心を刺激され、喜びを覚えるに違いない。

理人のことを心から応援するのは、そんな彼の生き方や考え方を、ひとりの人間として尊敬しているからだ。

私がおもひ彼の立場なら、たとえ才能や容姿に恵まれていたとしても、常に変化や緊張ととなり合わせの生活になって、きつと耐えられないだろう。

「何で？」

「私の仕事なんて、ルーチンワークの連続だもん。そのうち目瞑めつぶつてもできるくらいのこと」

「そうか？」

中身を飲みほしてしまった私のグラスに、追加のビールを注つぎながら、理人が訊きねる。

「ルーチンワークって決めつけたらそうかもしれないけど、それは風の気持ち次第なんじゃないのか？」

「気持ち次第？」

「そう」

自分のグラスにもビールを注つぎ足して、彼は続けた。

「——そこに新たに得るものがあるって思いながら仕事すれば、常に新しいことの連続だろ。どういう職種や内容であっても、自分の仕事を退屈で代わりばえしないものだ」と

決めつけるのって、俺はもったいないと思うけど」

「……なるほど」

そうか。いつも理人はそんな風に考えながら自分の仕事と向かい合っているのか。素直に感心してしまった。

彼の言葉通り、まさに最初から退屈だと決めつけていた自分が恥かずかしくなる。

「最初から飛ばしてるな。酔っ払う前に、約束のあれ出しとくか」

説教くさくなってしまうかもしれないと、私に気を使ったのだろうか。

話題を変えたいとばかりに茶化した口調で言うと、彼は席を立てて再び冷蔵庫へと向かう。

「やった、真打ち登場！」

楽しみにしていた『あれ』を拝めるとあって、私の頭のなかで期待でいっぱいになった。

「ほら、これ」

「わあ」

戻ってきた理人が手に持っていたのは、一本のビールだ。

片手でおさまるサイズの瓶に貼られたラベルには、ド派手な色彩で描かれた、骸骨がいこつの絵。これだけでももう、インパクト大だ。

「どうだ、飲みたがってたメキシコビールは」

「すごいすごい！ 早く飲みたい」

強烈なラベルの、メキシコ産クラフトビール。私はこれがずっと飲みたかった。早く抜栓しろと言わんばかりに足をジタバタさせて、理人を促す。

「子どもか、お前は」

彼は呆れつつも笑顔を見せて、栓抜きを手に取り、抜栓した。

「新しいグラス出すから、ちょっと待って」

理人はもう一度冷蔵庫まで戻ると、霜のついたグラスをもうワンセット運んできた。

「私が注いであげるね」

気分がいい私は、奪い取るようにグラスに手を伸ばした。カウンターに置いたそれぞれのグラスに、慎重にそれを注いでいく。

——だけではおさまらない。

「はい、改めて乾杯」

いち早くその味を確かめたい私は、そう言いながら、ビールを注いだばかりのグラスをふたつ、自らかち合わせて乾杯をすませた。そして片方のグラスを口元に運ぶ。

「うわ、苦っ」

樽に違わぬ苦味に、つい眉間に力が入る。

立ち読みサンプル はここまで

なるほど、ラベル通りのパンチのある味だ。結構気に入ってしまったかもしれない。お酒が好きで、なかでも取り分けビールが好きなのは、常に美味しいビールはないかとアンテナを立てている。そこで見つけたのがこれだ。

ラベルも味も、それをとっても強烈だという評判を聞き、機会があれば飲んでみたいと思っていたのだ。そして以前、そのことを理人に話した。

すると、彼は仕事関係で知り合った輸入会社の人から、たまたまこのビールを譲り受けていて、今度飲ませてくれると約束してくれたのだ。それが、今日。

「どう、感想は」

「苦いけど美味しい。またもらってきてよ」

「偉そうに言うな」

呆れた口調で言う理人が、スツールに座って私が注いだビールを一口飲んだ。すると私がそうしたのと同じように、眉間に皺を寄せて「苦っ」と呟く。その口調がおかしくて、私は声を立てて笑った。

好みの味ということもあり、あつという間にグラスを空にしてしまう。

「ありがと。堪能できてよかった〜」

なんてお礼を言いつつ、せっかくだしもう一杯——と私は瓶を持ち上げた。

「このビールと引き換えにわけじゃないんだけど」